

瑜伽師地論の宴坐宴黙について

高崎 正芳

原始部派仏教仏典における宴坐をめぐる言語と教理の中、注目されるそのいくつかについて、また大乘仏教仏典における宴坐をめぐる言語と教理の中の、注目されるいくつかの問題点と内容等について、今までに、時に応じて各の考究を発表しその小論を記述した。^①

その中、昨年度の本学会誌には、「法華経」「維摩経」そして「瑜伽師地論」などの一部にもとづいての記述をした。ここでは「妙法蓮華経」の訳者、鳩摩羅什が、サンスクリット Pratisaṃyāna (チベット語訳 nañ du yan dag hlog) にあたる訳語を、「坐禪」としていることをめぐる考察を述べた。鳩摩羅什以後の漢訳者、求那跋陀羅（四六八 A・D 寂）の「雜阿含經」中にも、「坐禪」とする訳語があつて、その原語もおそらく Pratisaṃyāna からなる動詞相の語であつたであろうことが、雜阿含に対応するバーリ仏典の用語 Paṭisaṃyati から、推定される場合もある。このように、古くは鳩摩羅什によつて、あるいはその後の求那跋陀羅等によつて、Pratisaṃyāna

や動詞相の語が、「坐禪」と訳されていると云うこと、そのことには、訳者の訳語上のそれなりの理由をもつた感念の働きが観察される。一方、鳩摩羅什訳「維摩詰所説經」では同じ原語の名詞・形容詞・動詞相の語を多く「宴坐」と訳し、またその他独特の意識を示す場合がある。こうした各仏典の用語は、原始仏教以来その後の各時代にわたって、言語と教理の相關展開の過程をもつものであるから、その間の重要なところに各照明をあてて、理解を進めて行くことができるわけである。鳩摩羅什訳仏典をめぐることは、前述したような点が特に注目されたのである。以下に述べる今回の論究では、「瑜伽師地論」を主体として、その言語と教理的内容のいくつかの点に対象を向け考察したところによる要点を、きめられた誌面に応じて記述して行くことにする。

「瑜伽師地論」の説く宴坐・宴黙の一部については、既に關説した小論も記したが、ここではそれらを配慮しながら、問題の中心面を前とやや角度を変えて考察を行うことにする。

玄奘訳『瑜伽師地論』卷第二十四、本地分中声聞地第十三
初瑜伽処種姓地品第一の中で、覺寤の瑜伽の修習を説きその
所説において「経行宴坐」と云うことを記している。

謂く彼れ是の如く食量を知り已つて、昼日分において経行と宴坐
との二重の威儀にて障法に順う従り其の心を淨修す。初夜分にお
いて経行と宴坐との二種の威儀にて障法に順う従り其の心を淨修
す。此の分を過ぎ已つて、住処の外に出で、其の足を洗濯し、右
脇にして臥し、其の足を重累し、光明の想に任じ、正念正知にし
て起想思惟し、夜の後分において速疾に覺寤し、経行と宴坐との
二種の威儀にて障法に順う従り其の心を淨修す。是の如くを名け
て初夜後夜常に勤めて覺寤の瑜伽を修習すと爲す。

この漢訳と対応するところのチベット訳の示す文では、

……彼はそのように食の量を知つて、中日に経行と宴坐との双方
によつて障になる諸の法から心を清淨にし、また夜の初夜分にお
いても経行と宴坐との双方によつて障になる諸法から心を清淨に
する。清淨にしてからその後で寺院より外に出て、寺院の外部で
脚をきれいにしてから寺院に入る。床の上に臥してから足を足の
上に重さね知覺の想と念と正知と真実起の想を作意するように睡
眼をし、それは夜の三小時の満ちた時（後夜分）にまた、ごくす
みやかにめざめてから、経行と宴坐の双方によつて障となる諸法
から（心を）清淨にする。それが初夜と後夜とにおける覺寤瑜伽
の修習といわれる。

と読める。

そしてまた、「瑜伽論」の梵文の、右記の漢、藏文に対応し
ているところでは、

……彼はそのように食の量を知つて、昼日（分）に経行と宴坐と
の双方によつて諸の障法から心を淨くする。初夜分（の場合）に
おいては、経行と宴坐の双方によつて諸の障法から心を淨くする。
（心が）淨くされてから各休息所を出て休息所の外で両方の足を
きよめ休息所に入つて、（右脇を下とすること）によつて臥床を作
す。足の上に足をくみ出世間を正知し憶念する。正知し氣力性を
意識しそして作意する。後夜分（の場合）においては、まさにご
くすみやかにめざめて経行と宴坐との双方によつて諸の障法から
心を淨くする。これが初夜後夜に目覺める人々の道理にしたがつ
た状態といわれる。

と云う意味の文がある。

それらの中、玄奘訳が「覺寤の瑜伽を修習す」と訳し、チ
ベット訳の「覺寤瑜伽の修習」とする文のサンスクリットは、
jāgarikānyuktatā である。それを今「目覺める人々の道理
にしたがつた状態」としたが、この *anyuktatā* は難詰、た
だす、こたえると云う意味の他の、もちまえとか物の性状を
表わす面の意味を云うものと理解される。チベット訳は *gru-
bal bar sbyor ba'i rjes su bñson pa rid* とする語を用い
ており、それが前記したサンスクリットや漢訳に対応するも
のとなつてゐる。なお A. WAXMAN 氏のサンスクリットに

は Jāgarikānyoga の語も見えるが・漢訳、チベット訳と対比した場合一考を要するようである。

次に玄奘訳の「経行・宴坐」のサンスクリットは caṅkramaṇa, nisīdya であり、チベット訳では hchag pa dan hduḡ pa となっている。これによつてわかるように、この部分の玄奘の訳語「宴坐」は nisīdya, hduḡ pa に相応する語であることがわかる。「宴坐」をめぐつては後により具体的な論述をする。

「覚寤の瑜伽の修習」、「目覚める人々の道理にしたがつた状態」を説く「瑜伽論」は、上記したような用語を用い、その内容やその行法を示しているわけである。前に記した所説を要約すると、そこには、昼日分と初夜分と後夜分の各において、経行宴坐によつて、内的には諸の障法から心を淨くすることや、中夜分の睡眠の外的な内的なあり様について説いているのである。ところが実はこれと類同する内容が、原始仏典でも説かれている。その一例を示してみる。

比丘達よ、更に（より以上に）なすべきことは何か、覚寤の修習である。昼日分に経行宴坐によつて障法より心を清淨にする。夜の初分に経行宴坐によつて障法より心を清淨にする。夜の中分に右脇にして師子臥をなし足の上に足を相累ね、正念・正知・起相を作意しながら（寢て）、夜の後分に起き経行宴坐によつて障法より心を清淨にする……

これは「中部」三九「馬邑大経」"Mahā-assapura-sutta"の所説である。「馬邑大経」には十七項の修行道を説いているが、ここに引用したのはその第八番目の項目にあげられているものである。ただ漢訳「中阿含経」瞿曇僧伽提婆訳「馬邑経」第一では、修行道の項目数がパーリー經典と同じではなく、パーリー經典第八項の文章は漢訳に含まれていない。だがパーリー「中部」「馬邑大経」の用語 Jāgarīyam anuyutta ya caṅkamaṇa nisajjāya その他の語や、修道の所説の内的な意味あいには、前の「瑜伽師地論」の場合と類同した内容となっている。

また「四分律」に説く次の記述も注意されるであろう。

比丘に是の如き聖戒あり、聖諸根を得、食中において能く止足を知り、初夜にも後夜にも精進して覚悟し、若しは昼日に至りて、若しは行、若しは坐、常爾に一心に諸蓋を除かんと念じ、彼れ初夜において、若しは行、若しは坐、常爾に一心に諸蓋を除かんと念ず。彼れ中夜において、右脇を側らにし、脚を累ねて臥して念ず、時に當つて起想を明に繋げて在り、心に錯乱なし。後夜に至り更ち起きて思惟す。若しは行、若しは坐、常爾に一心に諸蓋を除かんと念ず。

「四分律」では、これに続いて更に関連のある記述を含んでいる。これに類する記述は「十誦律」にもあり、そこでは「坐法とは」とあつて、昼日、初夜、後夜に各坐し、惱蓋を遮し、

中夜の臥床の法などに言及している。

「四分律」や「十誦律」のこうした所説が、前述した原始仏教仏典と共に、「瑜伽師地論」声聞地の説くところと相互に関連する内容を有していることは意味深い。そしてそういう様相は、「瑜伽師地論」における覚寤の瑜伽を修習するについての経行、宴坐、及びそれにつながる要点内容を考究する上に、一応理解しておいてよい事がらである。

「瑜伽師地論」においては、前述した声聞地種姓地品の記述のほか、声聞地出離地にも、同じ問題を出している。しかもこの場合は前記種姓地での所説を、更に広釈すると云う型のものとなっていて、色々な面で具体的な解釈がなされている。そしてそこでは、覚寤の瑜伽の修習をめぐる、修道の行法と内容教義とにわたって、長文の広釈があり、その全体については、とうていここに述べることはできない。それについてはまた別に論ずることがあるかと思われるので、今は特に必要なところを中心にして、考察を進めることにする。

広釈の中、先づ経行と宴坐を解する所説についてみることにしよう。caṅkrama 経行は、玄奘訳では「謂く広長其の度量に称へる一つの地の方所における若しくは往、若しくは来と相応する身業なり」となっている。これは理解しやすく訳されているようであるが、移動を長く広く一地の方向に行つてまた回ると云うそう云う身業が経行と云われるわけであ

る。こうした経行の形態的な説明は、更に別に細部の記述もあるが、基本的には右に記したところによつて説明されている。そして経行における内的なことがら、即ちいかにして、経行の時に心を浄修するか、と云う点についての広釈があるのでその要点を述べてみる。それは経行によつて昏沈と睡眠を引く障から心を浄修することを説くものである。たとえば相想に適して非常に善く取り善く思い善く分別し、光明を俱し光明を俱した心によつておおわれること。仏を念じ法あるいは僧あるいは戒あるいは捨あるいは天を念じ、淨妙である所縁の境界は善意を示現し、勤発・激励・大喜すると云うこと。契経・応頌・記別等の十二分経は睡眠と婚沈を断ずる教であることを称揚し讚歎すること。頌等の誦誦をし、また他にその義を開示し、義を思惟し、量分別し、觀察すること。月と諸星をみ送り、水で面部を洗うことなどがあげられており、それらにおける法増上によつて障法を出離すると云うような意味のことが示されている。

経行に関するこうした広釈所説と共に続いて、宴坐についても広釈がある。ここでは、大牀あるいは小牀あるいは草葉座に結跏趺坐して、身体を正直にして直面して安定したのが坐である。と云う意味の解説がなされている。そして宴坐によつて、いくばくの障法において心を浄修するのにかつて、その内的実質面の所説もある。そこでは貪欲・瞋恚・掉挙・

惡作疑蓋等と、それらを引く諸法から心を淨修すると云うこと。食欲の纏蓋が生じたのを除かしめ、末生を遠離せしめるゆえに宴坐をし、宴坐により諸の觀法を修すると云うこと。

（その觀法は、Vinīka, Vīdhaṭṭa Vipadumaka 等の想をもつて觀するもの）。また經行のところでも説かれていたように十二分經等、よき法を聞き、持し、誦し、意は精通し、見は深く悟り、多くの門を以て食欲・欲愛等の斷を稱揚する法を宴坐により理のごとく思惟すること。そして食欲の纏蓋の末生を生ぜしめず、已生を離れしめる、と云うような、大要そう云うような意味の内容を説いている。

「瑜伽師地論」中、覺寤の瑜伽の經行。宴坐、結跏趺坐に関して、結跏趺坐をする因縁を広説したところがある。玄奘は次のように訳している。

云何が威儀円満なりや、謂く昼日分において經行宴坐し、初夜分において亦復是の如し、中夜分において右脇にして臥し、後夜分において疾く疾く還起し、經行宴坐す、即ち是の如き円満なる臥具諸仏の許したまう所の大小の繩牀、草葉座等において結跏趺坐す乃至広説。何の因縁の故に結跏趺坐するや、謂く正しく五の因縁を觀見するが故なり。一には身摂斂して速に輕安を發するに由る。是の如き威儀は輕安を順生するを最も勝れりと為すが故なり。二には此の宴坐能く久時を経るに由る。是の如き威儀は極めて身をして速に疲倦せしめざるが故なり。三には此の宴坐は是れ不共の

法なるに由る。是の如き威儀は外道他論に皆あること無きが故なり。四には此の宴坐は形相端嚴なるに由る。是の如き威儀は他をして見已つて極めて信敬せしむるが故なり。五には此の宴坐は仏弟子共に開許したまう所なるに由る。是の如き威儀は一切の賢聖同じく稱讃するが故なり。正しく是の如き五種の因縁を觀ず、是の故に應に結跏趺坐すべし。¹⁰⁾

この玄奘訳の結跏趺坐・宴坐を述べたところは、他の仏典の所論と共に、座禪の理解に資する文として、宗学的見地からも注目されている。「瑜伽論」では、結跏趺坐する宴坐の五種の因縁を各項にわたつて、各の義を説くのであるが、その所説で玄奘が「威儀」と訳しているのは、この場合威儀路・行道の意である。また玄奘訳の「宴坐」は *hīṣṭvā*、即ち既に關説した「經行・宴坐」の坐を云うものである。論では五種の因縁に続いて宴坐・坐の身的な心的なあり方についても広釈をしている。そこでは身を正直（正願）にすることについて。身を端正に持することについて。正しい位処に入る（安住背念）についてなど、宴坐をめぐる具体的な解釈があたえられている。その二三の例を示すと、身正直については、身をはつきり正直にし安定し、心を無作にして奸惡でなく、正直に端正にして、悟入すると云う意味のこと、更に身を端正に持しては、婚沈と睡眠の心に取住しないこと。心を無作にして奸惡でないのは、外境の散動に取住しないこと、と云う

ような意味の広説がある。これらは内的な外的な坐法を説いたものと理解されるのであるが、その他にも坐をめぐる記述がある。右に述べたところは、「瑜伽論」が説く経行宴坐の広釈の基本的な記述の中の要点を取り上げたものである。この様な基本的な解釈の他、前にも闕説したように論中では、基本的なものから更に細部に展開する各種の所説もある。その中、覚寤の瑜伽の経行宴坐が行住坐臥の解釈と関連しているところがあること。あるいは同じく経行宴坐の内的な実態が、語・黙・勞睡とも深くつながっていること等が、注目される。そこで今「坐・宴坐」と「黙」、「臥」と「勞睡」のことについて、その注意してよい点を記述してみたい。

十二分経を広く読み、誦し、他に対してもくわしく宣説し、同梵行者やそれより余の在家者の賢善者と、精勵を生ずる所作法事のために、時時に談を交え共に語り種々のたのしみをなす等、それらの類、そう云う意味のものが「語」と云われると云う。この語の所説に続いて、次に「黙」が説かれている。静処 *viveka* にあつて前に聞き修行し誦した諸法による義を思惟した考察をする。宴坐 *Pratisamplayana* をなし、心は真実に住し安住し等住し近住し調伏し平静にし寂靜にし相續し等持し、また毘鉢舍那において瑜伽行をする。と云うような類、そう云う意味のことが「黙」であるとされている。默の所説の一部に「宴坐をなし、心を真実に住し安住し等住

し云々」とあるその意味のところの玄奘訳をみると、「静室に処して心をして内住・等住・安住云々」と訳している。その「静室に処して」と云うのは *Pratisamplayana* であることを注意しなければならない。更にこうした訳語は他に出離地の「閑居宴默」の語が *Pratisamplayana* の訳であると云う場合もある。その他にも玄奘訳「瑜伽論」が *Pratisamplayana* を「宴默」と訳する例を見るのである。そのように *pratisamplayana* が「静室に処して」云々とか「閑居宴默」とか訳されるのは *pratisamplayana* が場所的な問題、「静処にあつて」*viveka* 玄奘訳では「独り空閑に処して」と云うことの関連において考えられていることを意味している。（「スッタ・ニパータ」第六九偈の *paṭisallāna* 独坐・宴坐が註釈“*paramatthajotika* II, Vol. 1, p. 123”によれば *viveka* との関連で解釈されていることが雲井昭善博士によつて説かれてゐる^(註)）。そして同様に瑜伽論では、遠離 *viveka* を明すところがあり、処所円満・威儀円満・遠離円満を遠離と名づけるとし、「静室」や「閑居」と云うような意味のことは遠離の処所であり、覚寤の瑜伽の経行・宴坐 *nisāḍya*、前出の結跏趺坐の五つの因縁等は遠離の威儀であることが示されている。これらのことからして、*pratisamplayana* と *nisāḍya* とが *viveka* につながると云う内実を明らかにすることができると。また玄奘が「宴默」と訳しているについては、「黙」を説くところで觀察したように、

静処と宴坐「冥黙」と九心住と毘鉢舍那における瑜伽行等が「黙」であると云う、そう云う点が玄奘訳「冥黙」の用語の内的原因の一つと見られるようである。

玄奘訳「瑜伽師地論」では、*nīśadya* を多く「宴坐」と訳し（「坐」と訳することもある）、*pratisamlayana* を「冥黙」と訳している（「静室に処して」などの訳もある）。だが玄奘訳の「説無垢称経」では *pratisamlayana* を多く「宴坐」と訳していることもある（他に別な意訳がある）。これらのことからすると玄奘は、一つの原語 *pratisamlayana* を別な訳語「宴坐」とか「冥黙」などで表現し、反面、別な二つの原語 *nīśadya*, *Pratisamlayana* を一つの訳語「宴坐」と云う同一用語で表現したりしているわけである。一見矛盾しているような玄奘の訳語の用法も、実は前述したような内的な教法上の相関を考慮しながら、各の場に即して訳していると云う、訳者の作業を理解する必要がある。つまりそれは各の語を記している仏典の所説の内容や、教理的なあれこれの関連に深くかわりをもった訳業であることが考察される。したがってここでの問題に関する場合、それは訳者による訳語の不統一と云うようなものではなく、その訳語の用法は訳者玄奘の学術的教養を生かした、積極的な言語の用法に起因するものがあるといえる。

次に、「臥」と「勞睡」に関する要点について記述をする。

「臥」は前記したように、覺寤の瑜伽における中夜分の臥床臥寝の類を云うのであるが、中夜分の臥寝だけでは睡眠時間が非常に短い（四時間）ことになる。そのように常に睡眠時間は短かいのかと云うと、そうばかりではない。「勞睡」について「瑜伽論」は大要次の様なことを説いている。俄かな熱暑の時に於ける暑さによる損失や、外にゆき疲れを生じる時は、非時に惛寐し、睡眠を望むのであつて、そう云うようなことが「勞睡」と云われている。そしてそのことの広釈では、暑さによる労苦あるいは加行あるいは努力あるいは精進など、ある種の適した行いによつて疲労する原因の場合と、疲労する務めの時ではなくして睡眠のおこたりを生ずることになる場合とは寝る。そしてその義における何らかの因から、早急に正に惛睡をなくし、しかも長い時を経過して善品を毀損することなく、善品の障礙をなくせしめるために、寢息をすべきであると云うような、そう云う意味のことが疲労を除く睡眠として説かれている。更にまた、睡眠をする時には戸を閉じ、あるいは比丘をそばにるようにし、あるいは律相應の法衣を以て身をまとい、住所は閑処に在つて寝て、ねむりを消解する。そのようにしてすべての勞睡の類をみな無くすると云うような所説がある。

「瑜伽論」が暑さによる疲れを一応取り上げて説いているのは、比較的暑い地方での修習に対する配慮を記したものと考

えられるが、そう云う所説の様からするならば、實際上から云つて寒さの場合の疲れもあり得るわけである。そして論の説いていることは、中夜分の臥床などの他、比丘の環境や日常の行為事情において生ずる疲労や睡眠不足の場合をも十分におもんばかつて、いわゆる非時の昏寐、睡眠を行うことによつて、身心の損失や疲労の害を除くことを必要としていゝる、とするようなことを内容にしたものである。

- 1 高崎正芳「維摩經研究の一面」「禪文化研究所紀要」第六。「冥坐」「印仏研」第二三卷二号。「冥坐——大乘仏教仏典を中心として」「印仏研」第二四卷一号。「大乘仏教における冥坐の様相」「宗教研究」第四九卷・三輯。
- 2 「止観の研究」関口真大編「原始仏教における止観」中村元・四七〜四八頁。
- 3 「印仏研」第二十四卷一号二一七頁以下。
- 4 「大正蔵」第三十卷三九七頁中。
- 5 「西蔵大蔵經」影印北京版五五三七番・六下。
- 6 “ANALYSIS OF THE ŚRAVAKA BHŪMI MANUSCRIPT” by ALEX WAYMAN, p. 62 など。
- 7 「原始仏教」水野弘元・二〇六頁参照。PTS, MN. Vol. 1, p. 273。
- 8 「止観の研究」関口真大編「律蔵に現れた禪の実踐」平川彰・六一頁以下参照。
- 9 「大正蔵」第三十卷四二頁下。
- 10 「大正蔵」第三十卷四五〇頁上中。
- 11 「正法眼蔵序説」衛藤即応・二〇五頁。
- 12 「仏教学セミナー」第二十三号。

瑜伽師地論の冥坐冥然について（高崎）

執筆者紹介（六）

- | | |
|-------|----------------|
| 小此木輝之 | （大正大学助手） |
| 竹貫元勝 | （花園大学講師） |
| 原田弘道 | （駒沢大学講師） |
| 伊藤隆寿 | （駒沢大学講師） |
| 石上智康 | （東京大学卒） |
| 宇高良哲 | （大正大学講師） |
| 岡田栄照 | （寺院住職） |
| 川口高風 | （愛知学院大学講師） |
| 藤田恭爾 | （龍谷大学卒） |
| 中野東禪 | （曹洞宗教化研修所講師） |
| 斎藤彦松 | （梵字資料研究所） |
| 井狩弥介 | （京都大学助手） |
| 小林信彦 | （京都大学助教） |
| 野部了衆 | （聖徳学園女子短期大学） |
| 宮元啓一 | （日本学術振興会奨励研究員） |
| 生井衛 | （京都大学大学院） |

（二一〇頁につづく）